

二〇二五年度入学試験問題（第一回）

国語

（五十分）

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから17ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。。「」はそれぞれ一字と考えなさい。



一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

転勤を終え、東京に戻れることになった隆明の家族は、現在  
仙台の家で飼育している秋田犬の五郎丸の預け先が見つから  
ず、悩んでいた。妻の亜子が東京の住まいにマンションを選ん  
だため、五郎丸を連れていくことはできない。

今度の物件選びで主導権を握ったのは、世間の大方がそ  
うであるように、妻のほうだった。もちろんそれが言い訳  
であることに、隆明自身も気づいてはいた。

実際に東京の不動産事情を目の当たりにしてみて、肌身  
に沁みてわかった。たとえペット可のマンションだとして  
も、秋田犬であることを考えれば明らかに狭すぎて大きな  
ストレスを与えてしまうはずだし、成犬の糞尿の量はす  
ごくで、その点から考えてみても非現実的といえた。一軒  
家を借りるとなると、よほど築年数が古いものでもなけれ  
ば夢のまた夢という話だと気づくの、さほど時間はかか  
らなかった。

「八方塞がりだ。まいったな」隆明は頭を抱えこんだ。「あ  
と数日しかないっていうのに、どうすりゃいいんだよ」

二人はすっかり堂々巡りの円の中をさまよっていた。し  
ばらく黙りこんでいたが、亜子がぼつりとこんなことを  
言った。

「五郎丸つて、自分で餌をとれるのかな」

「どういう意味？」

「森とか野山とか、そういう場所へ行ったら何か他の生き  
物を捕ったりできるのかな、と思って。ほら、いつだった  
かあなたが話していたことがあったじゃない。車でどこか  
へ連れていったときに何かを口でくわえてきて、すぐ五  
郎丸が生き生きしてたって」

「ああ、あつたな」

一カ月に一度ぐらい、五郎丸を放して思いきり遊ばせて  
やるために家族全員で山や海へ出かけるようにしていたの  
だったが、たまたま隆明が休日にとりで連れ出したこと  
があった。

仙台の西の外れにある川原へ連れていったとき、しばら  
く姿が見えなくなっていた五郎丸が、心配した頃になつて  
戻ってきた。捕まえた野生の兎が口にくわえられていて、  
すでに息絶えていた。まっ白な毛が血で染まっているのを  
見て、気味が悪くなった隆明は放すように言ったのだが、

草むらの中へ持って行って食べたらしかった。

「あのときはちよつと気持ち悪かったけど、あとから考え  
たよ。五郎丸は苦勞してようやく捕まえた獲物えものを持って  
いったのに、どうして褒めてくれないんだろうと不思議  
だったんじゃないか、つてさ」

「あの子だったら生きていけるんじゃないかな」

**B** さつきから薄々うすうす勘づいていたが、気づかないふりをして  
いた。しかし事ここに至っては、これ以上そうしているわ  
けにいなかった。

「山に捨てることを、考えてるのか」

彼女は否定も肯定こうていもせずに、こちらの目をじつと覗のぞきこ  
んだ。いつまで逃げてにるつもりなの、とでもいうように。  
決断するのは、夫であり父であるあなたの役目なのよ、と  
でもいいいたげに。

隆明は言った。

「動物管理センターに無理にでも置いてきて、新しい飼かい  
主がでてくる可能性と、森に捨てて五郎丸が自分の力で生  
きていける可能性と、どっちが高いだろう。つまり、五郎  
丸がおれたち家族から離はなれても、このあとも、ずっと生き  
つづけていく可能性の高いほうを選ぶべきなのかもしれない

い。どう思う？」

「私としては」

亜子はいったん言葉を切った。**C** 気軽に答えてはいけない  
問題だと、気づいたらしかった。

夜中の十二時を回っていた。隆明は引つ越し前後の十日  
間を、有給休暇きゅうかの消化も含めてとつていたから明日も出  
社しないですむが、まさかこれほど引つ越し直前まで仙台  
に居残ることになるとは考えてもいなかった。

「酒でも飲むか。やりきれない話になりそうだ」

「私はいりません。お酒の力を借りて決めたつて、あとで  
自分で後悔こうかいするのは絶対嫌いやだから」

ビールをとり出そうと開けた冷蔵庫れいぞうこの扉を、隆明はそ  
のまま閉めて、椅子いすに戻る。

「確かに、アルコールに逃げようとするのは卑怯ひきょうだった」

ここから先の結論がどうであれ、自分と妻とがきわめて  
卑劣ひれつな行為に手を染めることに間違まちがいはないだろうと思つ  
た。だからこそしらふでいなければならないという、彼女  
の言い分もよくわかる。**\***

「センターの係員の人の話を聞いた限りでは、秋田犬の成  
犬がもらわれていく確率はきわめて低いだろう。譲渡会じょうど

に何度もだされて、それでも飼い主希望者が出てこないときは」

その言葉を言いたくなくて、隆明は口をつぐんだ。自分はどこまで弱い男なのだろうか。

「私はね、五郎丸にとってどっちが幸せなんだろうって考えてみた。東京の住まいを選ぶのに、立地や環境を含めて私のほうが強引に主張したのはわかっている。でもそれはあくまでも家族のことを、あなたや翔太のことを第一に考えていたつもり。もちろん私自身のわがままが入っていることだって知ってる。でも、とにかくもう飼えないことは事実として確定してしまっている。だからあと私たちにできるのは、犬が少しでも幸福に生きられるように考えてあげるくらいじゃないかなって」

引越しの前日だった。明日の朝引越し業者がきて、荷物を積み込むのを見届けてから家族で東京へ向かう予定だった。

翔太は朝からそわそわしていて、何度も犬小屋へ足を運んでいた。東京の家では犬を飼えないから、仙台の知り合いの家に飼ってもらうことになったと話したときは、しば

し訳がわからないという顔をしてから、声をあげて泣きだした。

翔太も一緒に行くといったものの、クラスの友だちが開いてくれる送別会に出なくてはいけないから無理だと、亜子が言い聞かせた。

「ねえ、お父さん。ゴローは幸せになれる？」

朝食後、翔太が突然そんなことを訊いてきた。うろたえそうになるのをこらえて、さり気なく、しかし力をこめて答えた。

「犬の気持ちは人間にはわからない。でもな、お父さんはきっと幸せに生きていけるはずだと思うてる」

「どうしてそう思うの」

「五郎丸がこれから住む場所は、自然がいっぱいだからだ」

「自然がいっぱいだとゴローは幸せなの？」

「山や海へ連れていったときの、五郎丸の楽しそうな姿を憶えてるだろう。犬は家の中にいるより、自然の中にいるほうがうれしんだよ」

D  
息子に|向かって嘘をついているというよりも、自分自身を欺いている行為だと思えてきた。

「今度の家は、うちよりも大きい？」

「ああ。比べものにならないくらい大きい。走っても走っても走りきれないほど広いんだ。五郎丸はもともとは仙台の西のほうにある、山の奥で生まれて育った大らしい。山や森や溪流の中で遊びながら育ったから、言ってみれば野生児だな」

「野生児ってなに？」

「野山で、自由にのびのびと育った子どものことさ。だから元気で逞しい。ほとんど放し飼いのような状態だった。けど、いつもお母さん犬や兄弟犬と一緒にだったから、いろんな知恵が身についてるんだ。だから初めてうちにきたときだって、うんちやおしっここの場所をすぐに憶えただろう。だからもちろん、自分で餌をとる方法だってわかる。兎だって鳥だってなんだって、捕まえて食べちゃう」

「でも餌はくれるんでしょう。新しいうちで」

「もちろんだ」

翔太の顔に影がさしていた。家を出るまでの間に何度も何度も五郎丸に抱きついて、最後はとうとう号泣してしまった。涙と鼻水が混じった翔太の顔を、五郎丸はぺろぺろとなめた。

送別会の時間に間に合わなくなるからと急かされて、後

ろ髪を引かれるようなようすで出かけていった。無言のままコーヒーを飲んでから、隆明と亜子は五郎丸を乗せた車をだした。

「一つの嘘は、三十の嘘を連れてくるって何かで聞いたけど、ほんとね」亜子がぼつりと洩らした。「うちのお父さんとお母さん、息子に嘘ばかり言ってる」

「これからは、嘘つきは泥棒のはじまりだなんて言えなくなるな」

湿った笑いが車内を満たした。それきり黙りこんでハンドルを握った。西公園を過ぎ、西道路の青葉山トンネルを抜けて、国道四八号線を西へ向かった。最初は住宅が多かったが、徐々に田んぼや林が多く目に入るようになってくると、道路は上り坂が増えてくる。

熊ヶ根で道を右に折れて十分ばかり走ると、やがて大倉ダムが見えてきた。だんだん細くなってきた道路をさらに進んでいくと、不意に大きな駐車場へ出た。定義如来西方寺、通称、定義さんと呼ばれる山奥の寺院だった。

旧本堂前の通りは小さな門前町で、他県からも参拝客が訪れる観光地のようになっており、駐車場には団体客用の大型バスが何台も停まっていた。

「ここは？」亜子が訊いた。

「定義さんって聞いたことはないか」

「ううん、初めて。どうしてこんなところに来たの？」

駐車場に車を乗り入れて車を停めてから、隆明は答えた。

「ここでお参りしていいこう」

「お参り？」

「五郎丸が生きられるようにって、ひとりになっても無事に生き延びられるようにって、お願いするんだ」

参拝客で賑わう境内に入り、本殿まで行つて賽銭に千円を奮発してから手を合わせた。隆明は犬の無事を祈つた。どうか天命を全うできますようにと、心の中で願つた。亜子も神妙な顔つきで手を合わせていた。

車に戻ると後部座席で五郎丸が静かに待っていた。

「本当におまえは賢い子だな」隆明は誰にともなくつぶやいた。

「ここで放してやるの？」

「まさか」車に乗り込みながら答える。「もう少し先まで行く。川原に降りられる場所があるんだ」

ふたたび車を走らせながら隆明は言った。

「定義如来っていうのは、平家の落人が住み着いた里だ

と言われているそうなんだ。壇ノ浦の合戦で負けて、源氏の

追っ手から逃れてここまで敗走してきたんだな。他に何人も平家の人間が落ち延びてきたらしいけど、生き残ったのは平貞能という人とその従者だけだった。だから、五郎丸もそんなふう生き延びてほしいと思った。まあ、ただのこじつけだけどね」

「気持ちわかる。けど、どうしてここを選んだの」

「去年、会社の行事で芋煮会をやったときにこの辺まできて、そのとき帰りにあの寺に立ち寄ったんだよ。けっこう山奥だけど、なんとなく広々とした景色が気に入ってさ」

やがて道の左側に、開けた川原が見えてきた。右手には鬱蒼とした深い森が広がっている。川原に車を乗り入れて停めた。

「五郎丸が餌をとれなかったとき、ここから定義如来あたりまでなら楽に走っていけるだろう。最悪の場合を考えても、人がいて店もあれば何かしら食べ物にありつけるんじゃないかと思って」

後部座席のドアを開けると、五郎丸が飛び出すように降りてきた。人気のない川原や海へ連れていくときのようによろこび勇んで川へ駆け出すのかと思っていると、彼はそ

うしなかつた。

足元の土の匂いを嗅ぐように、鼻先を地面にくつつけている。そしてときおり、不安そうな眼で隆明たちを見あげるのだった。

「やつぱりおまえは頭がいい。もう、ちゃんと気づいてるんだ」<sup>E</sup>

五郎丸と呼びかけて、亜子が首のあたりに抱きつく。しばらくの間そうしていたが、やがて思いを吹っ切るように立ち上がった。隆明は地面に膝をつけてしゃがみこむと、五郎丸と同じ目線になってしばらく見つめ合つた。

きれいな眼だな、とあらためて思う。濁りも汚れもない、<sup>\*</sup>深山の泉を思わせる透明なまなざしだった。

そしてその瞳の奥には、かすかに哀しみの光が宿っていた。本当に、すべてお見通しなのだと感じた。

首筋を抱いて、背中から腹にかけてさすつてやると、五郎丸は気持ちよさそうに眼を細める。五分か、十分か、ずいぶん長い間そうしていた。彼は身じろぎひとつせず、<sup>\*</sup>薄情な飼い主の最後の愛撫に身をゆだねていた。

「お別れだ、五郎丸」

立ちあがつて犬のそばを離れる。まるで何もかもを知っ

ているような表情で、五郎丸はその場にじっと佇んでい<sup>たたず</sup>る。みずからの運命をさと<sup>\*</sup>り、諦観しているか。

「行け」

右手で合図すると、五郎丸は小首をかしげるような仕草を見せた。彼の眼は、まだ隆明を見ている。

「頼む、おまえのほうから行ってくれ。おれは、おまえをここに置いたまま車を出すことなんてできないんだ。さあ行け、行ってくれ」

そのとき五郎丸が静かに近づいてきて、ハンカチに顔をうずめている亜子の周囲をひと回<sup>す</sup>りした。ズボンの裾に鼻を近づけるようにしている。次に隆明のところへくると、やはり同じように身体<sup>からだ</sup>のまわりをひと回<sup>す</sup>りする。飼い主だった者の匂いを沁みこませている、とでもいうように。

五郎丸はきびすを返すと、車の横を通りすぎて道路を渡<sup>わ</sup>った。その向こうには深い森がある。無数のブナやミズナラの木々が濃い緑をつくりだしていたが、落葉樹の森ならではの明るさがあ<sup>F</sup>った。それがせめてもの救いのような気がした。

彼は森の入口にさしかかったところで立ち止まり、一度だけ首を回してこちらを振り向いた。

お願いだ。生き延びてくれ。

隆明は心の中で叫んだ。何度も何度も叫び、山の神さまに祈りを捧げた。森の下生えの間に、白い大きな身体は見え隠れしながら、やがてふっと視界から消えた。

「本当に、すまない」

白い姿が消えたとき、隆明はその場にひざまずいて呟いた。亜子は耐えきれなくなったのか、森に背を向けて泣いた。

そのとき森の中から、犬の鳴き声が聞こえてくる。

狼の遠吠えのように声は長く尾を引き、やがて森の奥に吸い込まれるように消えていった。声は一度きりだった。

「私たち、とうとう五郎丸を捨てちゃったね」

亜子は涙声のまま、森を放心したように眺めた。

「そうじゃない。捨てられたのは、おれたちのほうだ」

妻と同じ方向に視線を固定したまま、隆明は言った。

「卑怯で身勝手な人間のおれたちを、あいつは見捨てたんだ」

さつき五郎丸と見つめ合ったとき、身体を撫でていたと

き、強く感じた嘘偽りのない本心だった。もうひとつ、はっきりしていることがある。それは、<sup>G</sup>これでもう自分は一生犬を飼う資格を失ってしまったということだった。

山道を下る車の中で、こんなことまでして守りたかったものとは何だったのだろうか、隆明は考えている。おれたち家族は犬を捨て、犬に捨てられることで、いったい何を手に入れたというのだろうか。

(三浦明博『五郎丸の生涯』による)

#### 【注】

\*しらふ——酒に酔っていない状態。

\*落人——敗者として逃亡する武士。

\*鬱蒼——樹木が茂ってあたりが薄暗いさま。

\*深山——山を褒めていう言い方。

\*愛撫——なでたりさすったりすること。

\*諦観——本質をよく見極めること。

\*きびすを返す——引き返す。

問一 ― 線部 A 「非現実的といえた」とあるが、何が「非現実的」なのか。説明しなさい。

問二 〰 線部 1 「八方塞がり」、2 「影がさしていた」のここでの意味として正しいものを、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1 八方塞がり

- ア どこから見ても閉まっていて、隙すきが無い状態。  
イ 誰だれに対しても身構えて、敵を作ってしまう状態。  
ウ どうしても良い方法がなくて、動きが取れない状態。  
エ つまらない考えにとらわれて、あきらめるしかない状態。

2 影がさしていた

- ア 日が暮れて陰影いんえいがはつきりしていた。  
イ 感情が無くなって無表情になっていた。  
ウ 不安な気持ちで何も手につかなくなっていた。  
エ 不吉なことが起こりそうな気配を感じていた。

問三 ― 線部 B 「さつきから薄々勘づいていたが、気づかないふりをしていた」とあるが、隆明は何に気づかないふりをしていたのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 苦勞して兎を捕まえたのにどうして褒めてくれないんだろう、と五郎丸が不思議に思ったこと。

イ 五郎丸の引き取り先が見つからないなら森かどこかに捨てるしかない、と亜子が考えていること。

ウ 五郎丸を家族として大事に世話してきたが、秋田犬は本来自然の中で逞たくましく生きていけるということ。

エ 東京で住む場所は全て任せつきりにしていたのに、マンションに決めた亜子を責める気持ちでいること。

問四 ―線部C「気軽に答えてはいけない問題だと、気づいたらしかった」とあるが、なぜ「気軽に答えてはいけない」のか。説明しなさい。

問五 ―線部D「息子に向かって嘘をついているというよりも、自分自身を欺いている行為だと思えてきた」とあるが、隆明が自分自身をだましている行為とはどのような行為か。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 五郎丸が森の中で生きていくことが幸せかどうかわからないのに、「幸せに生きていけるはずだ」と息子に話す行為。  
イ 息子に五郎丸を森に放すことを伝えなければいけないのに、泣き顔を見て黙っている方が息子のためだと決める行為。  
ウ 息子の進学のため都心に住む必要がある、そのせいで五郎丸を手放さねばならないという真実を息子に伝えない行為。  
エ 兎をくわえた五郎丸の姿を覚えていない息子に、「楽しそうな姿を憶えてるだろう」と無理に納得させようとする行為。

問六 ―線部E「やっぱりおまえは頭がいい。もう、ちゃんと気づいてるんだ」とあるが、隆明は五郎丸が何に「ちゃんと気づいてる」と感じたのか。隆明が「やっぱりお前は頭がいい」と判断している理由も含めて説明しなさい。

問七 ―線部F「それがせめてもの救いのような気がした」とあるが、なぜ「せめてもの救い」になるのか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 明るい森は他の飼い主たちも秋田犬を放しやすいので五郎丸が一匹で生き続けることはなく、すぐに新しい家族を見つけられるから。

イ 道路を渡ったところにある森ならば、通りがかった人が五郎丸を見つけて新しい飼い主になってくれる可能性があり、寂しくないから。

ウ 暗いところに五郎丸を放すと隆明たちの気持ちも暗いまだが、明るい森で生きていくのだと思えば、五郎丸を放す罪悪感が薄くなるから。

エ 無数のブナやミズナラの木々が濃い緑を作り出すような自然豊かな場所であれば地面が柔らかいので、五郎丸がけがをせずに生活できるから。

問八 ―線部G「それでも自分は一生犬を飼う資格を失ってしまったということだった」とあるが、なぜ隆明は「一生犬を飼う資格を失ってしまった」と思ったのか。その理由を七十五字以内で説明しなさい。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

失敗は、怖<sup>こわ</sup>がり過ぎててもダメ、怖<sup>こわ</sup>がらなさ過ぎててもダメ。大切なのは、失敗と上手に付き合う方法を見つけることです。

人は、生きているかぎり、必ずいくつかは失敗しますし、事故を起こすこともあるでしょう。

あり得ることは起こります。どうしても起きてしまう「失敗」との付き合い方が上手なひとは、新しいこと<sup>\*か</sup>に果敢<sup>かん</sup>にチャレンジして、大きく飛躍<sup>ひやく</sup>するチャンスをつかむことができます。たとえそのチャレンジで失敗したとしても、数々の失敗と上手に付き合いながら積み重ねてきた体験的知識を生かして、どんな挫折<sup>さつせつ</sup>も乗り越え、さらに成長して、次のチャンスに備えることができます。

逆に失敗との付き合い方が下手なひとは、失敗するかもしれないリスクをひたすら避<sup>さ</sup>けるので、同時に成功するチャンスも逃<sup>のが</sup>してしまいます。また、失敗した経験からしか学べない体験的知識も身につけられないため、取り返しのつかない失敗が起こる可能性を低くもできず、実際に大きな失敗が起きてしまったときには、リカバー<sup>\*</sup>して回復す

る方法もわからず、大きなダメージを受けることになりま

す。  
では、失敗と上手に付き合うためには、どうすればいいのでしょうか。

予想できる失敗についての知識を蓄<sup>たくわ</sup>えて、常にその知識を念頭に置いて行動すれば、不必要な失敗を回避<sup>かいひ</sup>できる可能性は高まります。失敗が致命的<sup>ちめい</sup>なものになる前の段階で、その失敗の原因や特性を知れば、有効な対応策<sup>たいおうさく</sup>を考えて、的確な対応が取れるので、失敗が大きくなることを未然に防げます。

ですから、失敗と上手に付き合う上で大切なのは、失敗の種類や特徴<sup>とくちょう</sup>を整理し、失敗が起こる原因を分析<sup>ぶんせき</sup>し、失敗が持つ法則性を理解することです。

それらを誰もが理解できるように、論理的（科学的）な視座<sup>\*</sup>からのアプローチによって実行するのが「失敗学」です。まずは「失敗の種類」についての解説から始めましょう。

世の中の失敗は二つのタイプに分かれると私は考えます。

「許される失敗」と「許されない失敗」です。

もっと簡単に言うなら「よい失敗」と「悪い失敗」です。

まずは「よい失敗」について説明します。

「よい失敗」とは「個人が未知なるものに遭遇<sup>そくぐ</sup>して起きた失敗」です。個人が無知であつたり、あるいは、何かミスして起きるタイプの失敗です。この手の失敗をしたひとは、なんらかの批判やペナルティを受けることになります。その失敗で、ある程度、まわりのひとに迷惑<sup>めいわく</sup>をかけてしまったのであれば、叱<sup>しか</sup>られるくらいは仕方ないかもしれません。【1】、あまり責め立てたりするのは避けるべきです。

なぜなら、その「未知なるものとの遭遇による失敗」は、そのひとが成長する過程において、必ず通過しなければならぬものだからです。

失敗なしに人間は成長しません。ひとは失敗して成長し、また小さな失敗を体験して、その分、成長していくというくり返しのなかで、一つひとつの失敗経験から体験的知識を得ることで、次の大きな失敗を起こさないために、徐々に軌道修正<sup>きどうしゆ</sup>していくからです。さらには、その失敗経験を将来の成功へと転化することもあるからです。

<sup>B</sup> 失敗と成長・発展の関係は、生物学の「系統発生と個体発生<sup>B</sup>の仕組み」の原理に似ています。

私たちはどのようなプロセスを経て「人類」へと進化したのか、みなさんも学校の理科の時間に習ったと思います。系統発生で考えると、およそ一〇億年前、地球に初めて動物や植物の祖先となる多細胞<sup>たさいぼう</sup>生物が登場し、約四億六〇〇〇万年前に魚類が登場、その一部が両生類となり、そこから哺乳<sup>ほにゅう</sup>類が進化して、人類が誕生しました。

一方、私たちは母親の体内で受精卵から赤ちゃんにまで成長しますが、この個体発生においても、やはり系統発生と同様に、受精卵は細胞分裂<sup>ふんれつ</sup>をくり返して、最初は魚類、次は両生類というプロセスを経て、最後に「人間」の姿となります。

【2】、人類が誕生するまでの系統発生の一〇億年のプロセスが、赤ちゃんが誕生するまでの個体発生的一年足らずのプロセスとして、母親の体内で、再びくり返されているのです。

私は、人類が母親の体内で「魚類↓両生類↓哺乳類」という進化のプロセスをたどって生まれてくることと、人間が失敗から知識を得ながら成長していくプロセスに共通す

るものを感じます。

人類はこれまで、その長い歴史のなかで、さまざまな失敗を経験してきました。その失敗の数々が人類を進化させ、文明を発展させて、現在の私たちの世界につながっています。それは、一人の人間が成長するときも例外ではなく、人類がたどった歴史と同じく、数々の失敗を体験してこそ、初めて成長できるのではないかと思うのです。

この「ひとが成長するうえで、必ず必要となる失敗」が「よい失敗」なのです。

ですから、成長したいと望むひとは、積極的に

「X」失敗」を経験するべきです。

では、「悪い失敗」とはどのようなものでしょうか。

極端に言えば「よい失敗」に含まれないすべての失敗」

が「悪い失敗」と言えます。具体的には「単なる不注意や判断ミスで起こり、そこからは何も学ぶことができず、何度もくり返されてしまうような失敗」です。たとえ他人には迷惑をかけないものであったとしても「悪い失敗」です。失敗したひとにとって意味がなく、反省もされないの、習慣的にくり返され、やがて大きな失敗につながるリスク

があるからです。

逆に、失敗したひとにとって意味があり、成長を促すきっかけになったとしても、周囲の人間に悪影響を及ぼすような失敗は「悪い失敗」です。

一人の人間が成長するために他人が甚大なダメージを受けてもいいはずがありません。その失敗によって得られるメリットとデメリットを比べたとき、圧倒的にデメリットの方が多ければ「Y」失敗」なのです。

失敗から体験知識を得ようとすれば、一つひとつの失敗が取り返しのつかないほど大きな失敗につながるような気をつけながら、ダメージをリカバーできる程度の「Z」失敗」の経験を積み重ねていく必要があります。

もし、それが「悪い失敗」であれば、いくら経験しても、個人として成長することはできません。

ただし、そこには一つ、課題があります。仕事や日常生活で起きている大小さまざまな失敗のなかでも、経験したときにそこから体験的知識を得られるような「よい失敗」は、決して多くないということです。

ただ、この課題を解決する方法はあります。自分自身の

「よい失敗」だけでなく、他人の「よい失敗」からも体験的知識を得られるようになればいいのです。

そのためには、「自分自身が「よい失敗」をした」という数少ないチャンスが到来したとき、その貴重な経験から体験的知識を得るために有効な取り組みを実践すること<sup>じっせん</sup>で、失敗の本質を理解して、より確実に「よい失敗」から体験的知識を身につけていく経験の積み重ねが必要になります。

そのような経験を積み重ねていけば、自分が起こした「よい失敗」だけでなく、他人の「よい失敗」からも効率的に体験的知識を学びとれるようになります。

結果、たとえ自分自身で「よい失敗」を経験する機会が

問一 ―線部A「失敗と上手に付き合う方法」とあるが、その説明としてふさわしくないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 失敗の原因や特性を知り、的確な対応を取る。
- イ 失敗についての知識を蓄え、それに基づき行動する。
- ウ 失敗の種類や特徴を整理し、失敗の法則性を理解する。
- エ 失敗するかもしれないリスクを理解し、ひたすら避ける。

少なくとも、資料として記録されている他人の典型的な「よい失敗」の原因を分析することで、そこから体験的知識を学び、自身の成長につなげられるようになるのです。

(畑村洋太郎『やらかした時にどうするか』による)

#### 【注】

- \* 果敢 ― 思い切ってする様子。
- \* リカバー ― 失敗した状態を立て直す。
- \* 視座 ― 観察する立場。
- \* アプローチ ― 接近すること。
- \* プロセス ― 過程。
- \* デメリット ― 不利益。

問二 【 1 】、【 2 】にあてはまることばとして最もふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし                      イ だから                      ウ つまり

問三 —線部B「失敗と成長・発展の関係は、生物学の「系統発生と個体発生 of の仕組み」の原理に似ています」とあるが、どのようなところが似ているか。本文中のことばを用いて説明しなさい。

問四 

|   |
|---|
| X |
|---|

}

|   |
|---|
| Z |
|---|

 にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

|   |      |      |      |
|---|------|------|------|
| ア | X…よい | Y…よい | Z…悪い |
| イ | X…よい | Y…悪い | Z…よい |
| ウ | X…よい | Y…悪い | Z…悪い |
| エ | X…悪い | Y…よい | Z…よい |

問五 ―線部C「そこには一つ、課題があります」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「そこ」とは何を指しているか。解答欄に合うように十二字で書き抜きなさい。

(2) 「課題」の解決策として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大きな失敗につながらないように気をつけながら、他人と共に「失敗」の経験を積み重ねる。  
イ 仕事や日常生活の中で起きている失敗に常にアンテナを張り、他人と同じ失敗を経験する。  
ウ 自分の失敗だけでなく、他人の「よい失敗」の原因を分析することで体験的知識を学びとる。  
エ 他人の「よい失敗」のみから学んだ有効な取り組みを実践することで、成功の本質を理解する。

問六 ―線部「よい失敗」と「悪い失敗」について、次の問いに答えなさい。

(1) 筆者が「よい失敗」を経験するべきだという理由を説明しなさい。

(2) 筆者が「悪い失敗」を経験するべきでないという理由を説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 美容院でザッシを読む。
- ② 有名なハイユウに出会う。
- ③ サイガイの発生に備える。
- ④ ユウビン局で切手を買う。
- ⑤ 糸を組みあわせて布をオる。

